

・フローム
ムステルダムへの帰還
美術館蔵)

The First Modern Economy
Success, failure, and perseverance of the Dutch economy, 1500-1815
by Jan de Vries and Ad van der Woude

Copyright © Cambridge University Press, 1997
Japanese translation rights arranged with
Cambridge University Press
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

序 文

今となってはずいぶんと昔の話になってしまったが、ある夏の心地よい夕べ、アド・ファン・デア・ワウデ邸の裏庭に腰掛けながら、我々二人はオランダ共和国経済の歴史を新たに書くべき時が来た、との結論に達した。頭にイメージしていたのは、この劇的な歴史を簡潔に描く概説書で、共和国経済の興亡に関して、学者や学生、一般人向けに親しみやすい形で解説を施すというものであった。

それに比べて、今回読者に提供する本書ははるかに野心的である。我々は、オランダ経済史の概説をまとめていく過程で、真に必要とされているのは一つの解釈であることに思い至った。つまり、膨大な研究成果をまとめ上げ、複雑なオランダ経済を包括的に説明した上で、それをヨーロッパ史の文脈や経済理論の枠組みにしっかりと位置づける研究である。こうした難題との格闘を通じて、我々は初めて同経済の近代性をしっかりと認識できるようになった。現代経済に通常用いる専門用語を使って、オランダ経済の成功と失敗を理解することが必要なのである。そういったわけで、本書に関わる調査や執筆は、いわば発見続きの航海であった。それは乗船時の予想を超える長旅

となったが、はるかにやり甲斐のあるものとなった。

本書の大半は、オランダのワッセナルにあるN I A S (オランダ先端研究所) およびカリフォルニアのサンタモニカにあるゲティー人文・芸術史センターとともに滞在した期間に執筆されている。同研究センターから提供を受けた時間、知的刺激、および後方支援がなければ、本書がこのような形で実現することはなかっただろう。センター長ならびにスタッフの方々に感謝するとともに、これからも研究支援事業が長期にわたって続いていくことを願っている。

一九九二年六月にN I A Sでの滞在が終了した時点で、残念ながら我々の作業は完了していなかった。残る数章分の執筆を終え、相互に翻訳して、オランダ語版と英語版を完成させるにあたって、電子メールは互いに一万キロも離れた著者にとってまさに天の恵みとなった。この英語版は、オランダ語版と若干異なっている。外国の読者の便宜を考慮して解説を詳しくした箇所がいくつかある。また、オランダ語版より遅れて出版された分だけ、最新の文献から我々の議論に関連する事実をいくつか組み入れることができた。

・フローム
ムステルダムへの帰還」
美術館蔵)

ii 原稿が完成しても、出版の作業が終わるわけではない。パークレーではヒース・ピアソンが表や文献目録の作成、および英語テキストの手直しに協力してくれた。また、ワーヘニンゲンではピート・ホルマンが地図やグラフを作成してくれた。ひとりひとりの名前は挙げないが、評者の方々のおかげで、説明を加えるべき重要なポイントがいくつも明らかになった。我々はこうした方々全員に感謝している。

一九九五年一〇月一日

ヤン・ド・フリース

(カリフォルニア大学バークレー校)

アド・ファン・デア・ワウデ

(ワーヘニンゲン農業大学〔現ワーヘニンゲン大学〕)

目次

序文 i
凡例 ix

第1章 はじめに 1

- 1 先行研究について 2
- 2 本書の目的 5

第I部 構造

第2章 空間と時間、構造とコンジュンクチュール 8

- 1 構造 8
- 2 コンジュンクチュール 17
- 3 移りゆく景観——「黄金時代」的環境の構築 24
- 4 環境の反応 36

・フローム
ムステルダムへの帰還」
（美術館蔵）

第1章 はじめに

当時——そして、その後長らく——世界はオランダ共和国の、特にその経済的効率性と社会の協調性を褒め称えた。一七七六年にアダム・スミス Adam Smith は「土壌と気候の性質、ならびに他の国々との位置関係が許す限りにおいて、富を上限まで獲得した国」として、共和国以上の好例を思い浮かべることができなかつた。スミスによれば、そうした秩序だった効率性——すなわち古典経済学の目標——は、オランダにおいて最も完全に近いレベルにあった。以来、こうした早期の輝かしい繁栄の姿は、人々の心に生き続けた。

しかし、この名高い「オランダの事例」からどういった教訓を学び取ればよいのだろうか。スミスにとつては自明であったろうが、その後、歴史的アプローチはその問題を明確化するどころか、かえってわかりづらいものにしてしまった。エリック・ホブスボーム Eric Hobsbawm、フェルナン・ブローデル Fernand Braudel、ヴァイオレット・バーバー Violet Barbour、イマニュエル・ウォーラーステイン Immanuel Wallerstein と

いった歴史家たちは、互いに毛色が異なつてはいるものの、オランダの成功が本質的に前近代的であり、将来性に乏しい要素が積み重なった結果だと確信していた。「アムステルダムの登場は旧来のパターンを引き延ばした。それは、必然的に従来のルールに従う形で起こつた」とブローデルが断言すれば、ホブスボームもオランダの近代性を必要以上に強調する誘惑に負けないよう警告を発した。実際「（オランダは）長期的にみれば工業化をある程度阻害した」からだ。

経済学者がオランダ経済史を書く場合、プラス面を強調し、現代と密接に関連するポイントに注目しようとする傾向がみられる。ダグラス・ノース Douglas North とロバート・ポール・トーマス Robert Paul Thomas は『西欧世界の勃興 The Rise of the Western World』において明快に述べている。「事実、オランダこそ、我々が定義する持続的経済成長を初めて達成した国である……」¹。アンガス・マディソン Angus Maddison も近代史におけるオランダの位置づけをまったく疑っていない。

「過去四世紀間に、主導国（先端技術の導入に最も秀でており、最高の平均労働生産性を誇る国）は三つしか存在しなかった。オランダはナポレオン戦争までトップを維持し、その後イギリスがその地位を占めた。イギリスのリードは一八九〇年頃まで続き、それ以後は合衆国が主導国となっている」。

こうした学者たちや、さらに多くの人々が「オランダの事例」を例外なく自らの歴史的解釈や社会科学分析の核とみなした。しかし、歴史学の文献を繙いてみると、それらが充実した内容と多様性を誇りながらも、一つの大きな欠点を抱えていることに気がつく。総合的な解釈を提示する研究がほとんどなかったのである。

1 先行研究について

複数の著者がそれぞれ特定の年代、あるいは主題を担当する形で、中世後期から一九世紀初めに至るオランダの経済発展を包括的に描いた歴史書は、いくつも存在している。こうしたアプローチの一例として、J・H・ファン・スタイフェンベルフ van Stuijvenberg 編集による『経済史 De economische geschiedenis』（一九七七年）がある。同書は、年代別に割り振られた最初の五章で時代全体をカバーしている。カール・ダヴィッツ Karl Davids とレオ・ノールデフラーフ Leo Noordegraaf が編集した『黄金時代のオランダ経済 The Dutch Economy in the

Golden Age』（一九九三年）は、主題別のアプローチを採用した。ここでは、一〇名もの著者が一六五〇年までのオランダ経済史について特定の諸側面を論じた。『オランダ全史 At-gemene Geschiedenis der Nederlanden』において、経済史にあられた諸章では、より大局的な観点から論じられている。こゝでも複数の著者が、全一五巻中、第五巻から第一〇巻（一九七九〜八一年）に収録された論文において、「近代初期」時代に特有の諸側面に関する見解を示した。

こうした共同執筆にみられる長所と短所については、事細かに説明するまでもないだろう。各時代やトピックをそれぞれの専門家が扱うという長所はあるものの、各著者がそれぞれ独自のアプローチと問題関心でもって事にあたるという点は大きな短所である。各章を寄せ集めるために、脱着や重複する部分が生じるし、執筆者たちに一貫した見解を共有してもらうことはもちろん、詳細にわたる共同方針に従わせるといふのは、編集者にとつて至難の業である。

そうしたわけで、次に単独かせいぜい二人で書かれた研究論文について概観してみよう。このジャンルは、オランダ経済史において共同研究よりはるかに長い歴史を有している。こうした研究は一八九〇年、ドイツ人歴史家オットー・プリングスハイム Otto Pringsheim の「一七」一八世紀オランダ連邦共和国経済発展史論集 *Beiträge zur wirtschaftlichen Entwicklungsgeschichte der Vereinigten Niederlande im 17. und 18. Jahrhundert* の刊行から始まった。四〇年近く後に、同じくドイツ人

であるエルンスト・バーシュ Ernst Basch が『オランダ経済史 *Hollandische Wirtschaftsgeschiede*』（一九二七年）で同じ主題の研究論文を執筆したのは偶然ではない。オランダではこの種の研究分野が未発達であったこと、そして「当時、オランダの歴史学においては」ドイツの影響が非常に大きかったという事情を反映していたのである。

当時、主導的役割を担っていたドイツの学問研究は、その影響力を西欧世界全体に及ぼしており、それは特に経済史の分野で目立っていた。しかし、オランダにおけるドイツの権威は単にドイツ人学者の高い学問水準や、あるいはその人数の多さのみに基づいていたわけではない。これらの要因に加えて、イデオロギー的な要素を考慮しなければならない。経済的事象に関心を持つオランダ人歴史家のなかでも若い世代は、その大半が当時お新しかった社会民主主義運動（社会民主労働者党は一八九四年設立）に関わっていた。G・W・ケルンカンフ Kern-kamp や N・W・ポストゥムス Posthumus、また最も熱心に参加していた J・G・ファン・ディレン van Dillen は、いずれも Z・W・スネラー Sneller とともにオランダにおける経済史研究の父と目される人物であるが、彼らは同運動の理想に強く惹かれていた。この時期、オランダの社会民主主義勢力は、強力なドイツの姉妹政党と密接な関係を保っていた。こうしたわけ、オランダ経済史の若手研究者はドイツと二重に結びついていたのである。つまり、イデオロギー的には社会民主主義を紹介して、また学問的にはドイツ人学者の強大な権威のゆえに。

オランダの学者は、グスタフ・シュモラー Gustav Schmoller、ヴェルナー・ゾンバルト Werner Sombart、マックス・ヴェーバー Max Weber の著作を通じて講壇社会主義やドイツ歴史学派の影響を受けた。先ほど触れたプリングスハイムやバーシュの流れを直接引き継いだのがファン・ディレンである。一五〇〇年から一八〇〇年のオランダの経済発展について、彼はオランダ人の立場から、初めて本格的な総合研究を執筆することになった。これは当初、一九五〇年代に刊行された旧版『オランダ全史』に寄稿された論文であったが、その後大幅に加筆され、『富とレヘン Ten Van rijkdom en regenten』（一九七〇年）として彼の死後に出版された。プリングスハイムから八〇年を経過した後に、一五〇〇年から一八〇〇年のオランダ経済史に関する初の総合的研究書がオランダ語で刊行されたのである。

ファン・ディレンの著作は一つの始まりであり、同時に終わりでもあった。同書は、彼と同世代の研究者がドイツ歴史学派に刺激を受けながら進めた研究調査の成果を概観したものである。しかし、この本が刊行されるはるか以前の第二次大戦終結から、次世代の歴史家は従来と異なる道へと踏み出していった。オランダ経済史研究が、まずはフランスの歴史研究から、続いてアメリカから影響を受けたためである。こうした流れの中心となった人物が B・H・スリッヒャー・ファン・バート Slicher van Bath である。彼が学会デビューを果たした一九四五年の研究には、学位論文指導者だったドイツ人学者の影響が

みられる。しかし、その後、彼の手による先駆的研究『緊張下の社会——オーフェルエイセル農村部の歴史 *Een samenleving onder spanning. Geschiedenis van het platteland van Overijssel*』（一九五七年）および『西ヨーロッパ農業発達史 *An Agrarian History of Western Europe, 500-1850*』（一九六〇年、英訳は一九六三年）では方向転換がみられ、社会科学への接近を図った革新的なフランスの歴史家たち——アナル学派として知られる——と多くを共有するようになっていた。一九六七年にオランダの歴史家たちの目をアメリカの「ニュー・エコノミック・ヒストリー」に向けさせたのも、スリッヒャー・ファン・パードであった。ファン・ディレンの著書は定評ある参考文献ではあるが、こうした経済史研究の新たな潮流に関する記述はごくわずかにすぎない。

本書は——オランダ人とアメリカ人が——共同で執筆した作品である。我々の目的は、オランダ経済史の全体像を新たに構築し、過去一世紀近くにわたって同分野を導いてきた歴史的伝統を覆すことにある。本書では現代の歴史学諸派による挑戦を受け止め、それらを統合するところまで踏み込んでみたい。

フランスのアナル学派は「出来事を中心とする歴史」や、これと対になる政治・人物重視の姿勢からの決別を提唱した。それに替えて同派は、経済、社会、メンタリティ、環境における諸プロセスを幅広く取り込めるような、より奥行きのある歴史的時間の概念を発展させた。「クレオメトリックス」とも呼ばれるアメリカのニュー・エコノミック・ヒストリーは、ドイ

ツ歴史学派から着想や概念を継承した制度的で叙史的な経済史に挑戦した。経済理論の積極的な応用、数量データの系統立った使用、仮説検証の重視を通じて、クレオメトリックスは研究の焦点を政治や制度から市場や合理的な意志決定者へと移した。

これら二つの再生に向けた取り組みは、いくつかの点で相互補完的である。「アナル学派の」構造主義的歴史学が包括的で総合的であるのに対し、ニュー・エコノミック・ヒストリーは一般的にマーケット・パフォーマンスに関する特定の問題を取り扱う。フランスでの取り組みは概念面が充実しているものの、理論は折衷的である。一方、アメリカのそれは考察の幅が狭くなるが、理論面では緻密で整然としている。こうした相互補完的な特徴を持ち合わせているにもかかわらず、両者を組み合わせることはあまりない。それにはもつともな理由がある。人間に関わる事象に関して、前者は継続と安定性を強調するが、後者は意志決定の分析や成長度の測定によって、動態を重点的に扱うからである。アナル学派が前工業化時代のヨーロッパ社会を主な考察対象とし、ニュー・エコノミック・ヒストリーが一九世紀の工業化世界と最も相性が良いのは、決して偶然ではない。

力点を持続的な形態から変化・発展の過程へと徐々に移行させていく。

本書の執筆動機として、構造に関する問題（各部分がいかにかに組み合わされていたのか。どういった持続的特徴が人々の活動を導き、また妨げたのか）や状況に関する問題（オランダ経済がより大きな国際的枠組みのなかでいかに機能したのか。オランダは当時関係を保っていたヨーロッパや「東西インドといった」遠い世界とどういった点で異なり、あるいは共通していたのか、またそれらに對してどの程度影響を与え、あるいは影響を受けていたのか）がある。しかし、本書の中心的な主題は成長と変化である。オランダ連邦共和国を構成することになる地域がかくも突然に繁栄を極め、大きな国際的影響を及ぼすに至った経緯とは一体どういったものだったのか。オランダ経済の限界、挫折、失敗の原因とは何か。こうした互いに密接に結びついた問題を扱う場合、オランダ経済を西洋経済史全体の流れのなかで考えていく必要がある。後に触れるが、オランダの事例は多くの歴史学上の常識と対立するものである。これについては最後の二章で論じる。

最後に本研究の対象時期について一言触れておこう。本書の主題であるオランダ連邦共和国が独立した一つのまとまりとして立ち現れてくるのは、一五八〇年代である。終焉の到来は一七九五年で、「国家の成立より」さらに唐突な出来事であった。しかし、こうした政治上の出来事は、いずれも経済史の時代区分にとつてあまり参考にならない。本研究は一五世紀末、ある

2 本書の目的

構造に対してダイナミズム。広い視野に対して分析の緻密さ。本書は一五〇〇年から一八一五年におけるオランダ経済史について新しい解釈を提示するものであり、こうした両学派の違いを統合することが必要である。今回考察対象とする過去に新たな解釈を加えるには、近代初期世界（アナル学派の得意分野）に根ざしつつも一九世紀や二〇世紀の近代経済の特徴である経済的・社会的な行動・達成様式（ニュー・エコノミック・ヒストリーの重要テーマ）を先取りした経済を適切に扱える概念的枠組みが欠かせないからである。

本書の歴史解釈とは、手短かにいえば、オランダが史上初の近代経済だったというものである。第一部は、経済活動に関わる全体的な構造——地理、人口、金融、社会文化——を扱う。これらの構造が静態的なイメージから程遠い存在であることが明らかになるだろう。この次元ですら、オランダの経済活動における諸プロセスが力強く動く様を看取することができる。経済的变化を部門ごとに分析する第二部では、この特徴が一層明確に立ち現れる。分析を中心とする第三部では、理論と史実のつき合わせを徹底させることで、オランダ経済のダイナミズム——つまりは、同経済の本質である近代性——がはっきりとみえてくる。本書は、構造と変化を統合する構成を持つが、その

いは一六世紀初頭から出発する。これは一般に「長期の一六世紀」と呼ばれるヨーロッパ経済の拡大期が始まる時期に相当する。オランダ経済の起源は、この大きな歴史的文脈のなかで考える必要があるということである。

一方、どの年で考察を締めくくべきか、という問題にそれほど明快な解答はない。一七九五年を区切りとする案はオランダ経済の流れからみて必然性に欠けるし、ヨーロッパ経済全体の流れから見ると、なおさら受け入れがたい。旧共和国を引き継いだ新国家は、嵐のような騒乱と格闘した甲斐もなく、オランダを古い経済体制に縛りつけている各種の障害を払拭することができなかつた。こうした古い体制は一九世紀半ばまで一部残存することとなる。オランダが近代的経済発展の第二段階へと到達したのは一八五〇年以降である。しかし、対象となる時代をそこまで延ばすわけにもいかない。大幅な制度的変更を伴ったオランダ王国の成立は一八一五年であり、人口はその後、成長過程に入っている。一八一七年には国際物価動向も大きな節目（インフレからデフレへの逆転）を迎えた。こういった点を考え合わせると、オランダ史における「フランス時代」の終焉「すなわち一八一五年」をもって本書の区切りとするのが、論理的にも現実的な意味でも妥当といえるだろう。

第I部 構造